

日露戦争時の海軍軍楽隊

— 海軍軍楽長・吉本光蔵の明治37・38年日記から —

塚原 康子

はじめに

本稿は、海軍軍楽長・吉本光蔵（1863～1907）の明治37・38年（1904～05）日記（以下、吉本日記）に基づき、日露戦争中の第二艦隊旗艦・出雲乗組軍楽隊の活動実態を明らかにすることを目的とする。

戦時における日本の軍楽隊の活動については、戦後に軍楽隊員によって作成された回顧記事や聞き書きが多く残る太平洋戦争期を別にすると、その実態はあまり明らかになっておらず、20世紀初頭の日露戦争時における軍楽隊の行動に焦点をあてた先行研究もごく少ない。こと海軍軍楽隊に関しては、第一艦隊旗艦・三笠に乗艦していた河合太郎の短い回顧記事¹を別にすると、近年の谷村政次郎氏による論考²にほぼ限られる。谷村氏の論考は、連合艦隊の各艦隊旗艦と呉鎮守府・舞鶴鎮守府で作成された戦時日誌を主要な典拠に、軍楽隊の編成や交代、戦闘配置、戦死者等を初めて具体的に明かにしたものだが、艦上での奏楽状況については戦時日誌に記された事例に限られている。その点で、日露戦争開戦直前の明治37年（1904）1月から翌38年（1905）3月まで第二艦隊旗艦・出雲に軍楽長として乗り組み、1年3ヶ月にわたる従軍中、艦内での日々の活動を克明に書き留めた吉本日記の史料価値は非常に高い。そこで本稿では、谷村氏による先行研究の成果を吉本日記の記載によって立体化しつつ、日露戦争中の海軍軍楽隊の奏楽状況と活動の実態を明らかにしていきたい。

吉本日記の引用にあたっては、旧字・合字等を通行の字体に改めた。また、吉本日記の記述を読み解く上で必要な日露戦争の経過や人名・地名・艦船名等の基本情報については、主として海軍有終会編『近世帝国海軍史要（増補）』（原書房、1974年刊）と、アジア歴史資料センターが2004年にインターネット上に開設した「日露戦争特別展—公文書に見る日露戦争」（<http://www.jacar.go.jp/nichiro/frame1.htm>）および、その続編で2010年に公開され、陸上・海上での各戦闘について詳細な解説と関係資料の提示を行っている「日露戦争特別展II—開戦から日本海海戦まで激闘500日の記録」（<http://www.jacar.go.jp/nichiro2/index.html>）を参照した。

1. 吉本光蔵の経歴と業績

吉本光蔵の経歴と業績の概要を、平高典子氏と共同執筆した前稿³の記述をその後得た知見により増補しつつ紹介する。

吉本は、文久3年（1863）10月6日、江戸に生まれた。入隊時の海軍省の公文書には「島根県士族」、携帯履歴では出生地を「武蔵国麹町区有楽町」と記していることから、当地にあった鳥取池田藩上屋敷内で誕生したと思われる⁴。海軍軍楽隊入隊前の吉本の生活を知る手掛かりはないが、江戸ー東京に生まれ育ち、三味線音楽に耳馴染みがあったであろう点は、薩摩藩出身者が大半であった初期の海軍軍楽隊の中では異質な存在であり、それが早くから俗曲の五線譜化（後述）に取り組む端緒にもなったのではないかと推測される。

吉本は、明治11年（1878）6月20日、海軍軍楽隊が初めて募集した「軍楽通学生」に採用され、6ヶ月の通学期間を終えた12月28日に15歳で正式に「楽生」として入隊し、その翌年3月にドイツから着任した26歳の雇教師フランツ・エッケルト（1852～1916）から厳しい指導を受けることになった。専攻楽器はクラリネットだが、留学先のベルリンではピアノのレッスンも受けており、おそらく明治12年（1879）から隊員10名を選抜して開始された、海軍軍楽隊でのピアノ伝習メンバーの一人でもあったと思われる⁵。

昭和6年（1931）の吉本没後25年特集記事中に、軍楽通学生二期生で5歳下の瀬戸口藤吉（1868～1941）が証言するように、吉本は真面目で研究心の強い、楽譜等を書くことに堪能な人物で、エッケルトに非常に囑望され早くから和声学など特別の教育を受け、編曲・作曲にも通じていた⁶。いわば海軍軍楽隊におけるエッケルトの一番弟子とあってよく、師とのコミュニケーションのためドイツ語も学んでいた。後年、海軍軍楽隊初の留学生に選ばれたのも、音楽の実技・理論研究に加え軍楽隊の組織教育を調査するという任務を托すにふさわしい音楽的能力、実務経験、語学力を買われてのことだったと考えられる。

明治23年（1890）4月12日には、《越後獅子》《春雨》をはじめとする俗曲を吉本が五線譜化した楽譜が、「海軍軍楽練習所蔵版」として葦屋町の東陽堂から印刷刊行された。現在、国立国会図書館に、元来は1曲ずつのピース譜であった8曲分を合冊した楽譜集が所蔵されている⁷。各曲の表紙には、《越後獅子》を例にすると、日本語の「日本俗曲／長唄／越後獅子／海軍軍楽練習所蔵版／海軍一等軍楽手吉本光蔵取調／東京葦屋町東陽堂印刷」という表記に、ドイツ語の「Yechigojishi/ Japanisches populäres Lied/ für/ Gesang mit Shamisen-Begleitung/ Eigentum der Kaiserlich Japanischen Marine Musikanstalt/ Aus dem Japanischen in's Europäische übertragen v. M. Yoshimoto./ Toyodo, Autographers. Fukiyacho Tokyo, Japan.」という表記を横書きで併記し、右端には縦書きで「明治廿三年四月十二日出版」と記されている（図版1）。曲に合わせて、彩色した美しい絵を添えた表紙もある。三味線音楽の五線譜化として最も早い試みであるだけでなく、吉本の楽譜は、歌詞



Yechigojishi

Allegro moderato

Gesang

Shamisen

poco riten.

a. tempo

poco riten.

a. c.

図版 1 海軍軍楽練習所蔵版《越後獅子》の表紙と五線譜の第 1 頁 (国立国会図書館蔵、マイクロフィルム請求記号YDM 108443)

は付きさないものの歌と三味線を二段に分けて記譜し、最も長い《越後獅子》でも全曲を16頁にわたって五線譜化しており、翌明治24年(1891)に刊行された『日本俗曲集』(陸軍軍楽隊の小島賢八郎が五線譜化し、大阪の三木書店が出版)が三味線のみの簡素な楽譜であるのと比べても、楽譜として精密に作られた印象を受ける。吉本は、これらの「日本俗曲譜」をドイツ留学時にも持参し、求めに応じて貸し出したり写し与えたりしていた⁸。後の日比谷公園奏楽の演奏曲目にも登場する《越後獅子》などの日本物レパートリーは、これらの楽譜に基づいて吹奏楽用に編曲されたものと考えられる。しかし、瀬戸口も述べるように、海軍軍楽隊の部内資料として出版されたため、苦心の楽譜は一般に流通せず、吉本の早世も相俟ってこれらの業績は世に知られぬまま埋もれてしまった。

吉本はその後、35歳の明治32年(1899)5月13日にドイツ留学の命を受け、1902年3月18日に帰国命令を受けるまで、ベルリンに留学(1901年より駐在に変更)した。1899年8月20日にベルリンに到着してから1年余り準備した上で、ベルリン音楽院の入試を受けて合格し、1900年10月1日~1902年3月20日まで「軍楽学生」として音楽院に在籍、明治35年(1902)4月18日にベルリンを立ち去り6月13日に帰国した。留学中の吉本については、前稿を参照されたい。

吉本の作品として今日知られているのは、ドイツ留学中の作とされる《君が代行進曲》(原

名は《愛国行進曲》、日露戦争中に作曲された《旅順陥落行進曲》《浦汐沖水海海戦》、日露戦争後の《観艦式行進曲》（正式名称は《東京湾凱旋観艦式記念行進曲》）、《むすんでひらいて》の旋律による軍歌《戦闘歌》を用いた《進撃追撃行進曲》などである。明治期の海軍軍楽隊員で作品を残したのは、《軍艦行進曲》を作った瀬戸口藤吉、海軍軍歌《如何に狂風》や唱歌《美しき天然》で知られる田中穂積と、吉本光蔵の3名に限られる。

2. 吉本光蔵の日記について

吉本の日記4冊、手帳2冊、出納簿2冊と辞令等は、現在、吉本の令孫・玉川佳代子氏が所蔵されている⁹。これらの日記や資料については、玉川氏の了解を得て作成されたマイクロフィルムないし写真による複製が、東京藝術大学附属図書館に寄贈された。

このうち、ベルリン留学時代については、1900年・1901年の2年分を合わせて記した日記1冊と、ドイツで刊行されていたMilitärmusiker Notiztaschenbuch（軍楽員手帳）1902年版に、短い書き込みをしたものが残っている。ベルリン留学中の日記には、エッケルト一家をはじめとするドイツ人たちとの交流や、駐在・留学中の軍人たちが所属する「軍人会」、幸田幸・瀧廉太郎など留学中の東京音楽学校関係者との交友などが記録されている。

帰国後のものとしては、博文館発行の『当用日記』に記された日記3冊（明治37年・38年・39年）と、日露戦争前後に第二艦隊の軍楽隊員の異動や、軍楽隊の関係法規を書き留めた手帳1冊が残されている。明治38年3月の出雲退艦後の日記にも、その年8月に始まった日比谷公園奏楽、10月の東京湾凱旋観艦式等の記事が見え、翌明治39年7月には、34年（1901）に京城に赴任し朝鮮で軍楽隊の指導にあっていたエッケルトの日本再訪などの記事が含まれるが、本稿では扱わない。筆まめな吉本によって、日記には日々の軍楽隊の活動状況を記した本文に加えて、受信・発信欄に、家族・知人はもとより各海兵団在勤者との通信や、物品の発注・受取・支払に至るまでが事細かに記録されている。

これら吉本の日記と関連資料は、明治期の海軍軍楽隊のキーパーソンによる類稀な一次資料であり、しかも明治33年（1900）から39年（1906）までという比較的短期間ながら、ベルリン留学期、日露戦争従軍期、日露戦争後という全く位相の異なる三期にまたがり、吉本の足跡を通して各期の海軍軍楽隊の動向を窺うことができる点でも貴重である。

本稿は、このうち日露戦争従軍期に焦点をあてる。すなわち、吉本が佐世保で出雲に乗り組んだ明治37年1月3日から、朝鮮の鎮海湾において出雲を退艦する明治38年3月24日まで（発令上は明治36年12月28日～明治38年3月15日）の吉本日記を読み解き、戦時における海軍軍楽隊の動静を明らかにすることを主眼としたい。

3. 日露戦争中の海軍軍楽隊の配置と交代・補充

次に、日露戦争中の海軍軍楽隊の配置と、軍楽隊員の交代・補充の状況をまず見ておく。

海軍軍楽隊は、明治4年(1871)に兵部省海軍部の軍楽隊として発足し、翌5年の陸軍省・海軍省の分立により海軍軍楽隊となって以来、その拠点となる楽隊屯所—海軍軍楽練習所は芝・新銭座、芝・浄運院、築地などへの移転を経ながらも一貫して東京に置かれていた。しかし、明治23年(1890)3月に海軍軍楽練習所(築地)を廃し、海軍軍楽隊の教育はすべて横須賀海兵団で行う体制となった。また同年7月には、前年の呉鎮守府・佐世保鎮守府の開庁をうけて、呉・佐世保の各海兵団に軍楽隊1隊ずつが配置され、明治34年(1901)の舞鶴鎮守府の開庁により、舞鶴海兵団にも軍楽隊1隊が配置された。さらに、日露戦争中の明治38年1月7日旅順口鎮守府(翌39年、旅順鎮守府と改称)が開庁すると、ここにも軍楽隊1隊が配置され、軍楽師・佐野国盛が赴任した¹⁰。

日露戦争開戦時において、横須賀以外の三つの海兵団軍楽隊の定員は、士官(少尉相当官)である軍楽長または准士官相当の軍楽師1名と、26名編成の1隊(内訳は、下士官である一等軍楽手6名、二等・三等軍楽手11名、卒である一等・二等・三等軍楽生各3名)からなっていた。教育機能を受け持つ横須賀海兵団は規模が大きく、軍楽隊2隊を擁し、定員は、軍楽長2名、軍楽師5名のほか、一等軍楽手16名、二等・三等軍楽手32名、一等・二等・三等四等軍楽生各6名、の合計73名であった¹¹。

一方、常備艦隊への軍楽隊乗組は明治16年(1883)に始まり、当初は18名編成の1隊が乗艦していたが、明治19年(1886)からは各海兵団軍楽隊と同じ26名編成となった。日清戦争時には、常備艦隊・西海艦隊の各旗艦に軍楽隊が乗り組み従軍した。日露戦争時は、常備の第一艦隊(旗艦三笠)・第二艦隊(旗艦出雲)に加えて、開戦時に編成された第三艦隊(旗艦厳島)にも軍楽隊が配置され、さらに日本海海戦後の明治38年6月に編成された第四艦隊にも軍楽隊が配置された。このように、日露戦争期には、海軍軍楽隊の発足いらい最多の軍楽隊10隊が配置され、そのため日露戦争開戦直前の2月に予備役下士卒が召集された際は、初めて軍楽隊員も召集されており、谷村氏によると、確認できた日露戦争の従軍者数は、死没者も含めて、陸軍軍楽隊176名、海軍軍楽隊246名に上るといふ¹²。

このうち、旅順陥落後の明治38年1月には、第一艦隊乗組の軍楽隊は呉において呉海兵団軍楽隊と、第二艦隊乗組の軍楽隊は佐世保において佐世保海兵団軍楽隊と、1隊全員が交代している。各軍楽隊を率いる軍楽長(または軍楽師)も、第一艦隊は呉で軍楽長・本村四郎から軍楽師・丸山寿次郎へ(1月12日)、第二艦隊は佐世保で軍楽長・吉本光蔵から軍楽師・野坂栄太郎へ(3月24日)、第三艦隊は呉で軍楽師・赤崎彦二から軍楽師・内田誠太郎へ(3月20日、軍楽隊11名と同時)と交代した¹³。さらに日本海海戦後の明治38年6月14日付で、第一艦隊は丸山寿次郎から軍楽長・瀬戸口藤吉に交代、第四艦隊には旅順海兵団から軍楽師・

佐野国盛が赴任し、丸山は佐野の後任として旅順海兵団に赴いた¹⁴。

吉本日記から、1隊全員の交代以外の、出雲における軍楽隊員の交代・補充記事を拾ってみると、病気入院による事例と、昇進転任による事例があった。その場合、退艦地点にもよるが、退艦者の補充はいずれもきわめて迅速に行われている¹⁵。吉本は、2名の病気入院送籍者が出た明治37年2月4日、横須賀海兵団の高崎（能行）楽長に「補充者請求並ニ隊員楽器等の報告信書」を発信しており、軍楽隊員全体の配置は後年と同じく横須賀海兵団で行われていたと考えてよい。軍楽隊員の場合、こうした補充・交代にあたっては官階のみならず担当楽器とその技量にも配慮しなければならず、谷村氏の指摘するように¹⁶、事前に綿密な補充計画が立てられていたものと思われる。

なお、軍楽隊員の戦闘配置は、基本的には負傷者の救護と運搬であったが、三笠では伝令や信号助手等も担当したという¹⁷。出雲では、前部・後部の治療所の助手および負傷者運搬手が軍楽隊員に割り当てられ、吉本自身は前部治療所の助手の一人に配置されていた¹⁸。吉本日記には、乗艦して間もない明治37年1月15日と、1隊ごと交代した後の明治38年2月27日・3月9日・3月15日に、「看護術」の練習を行った記事がある。

日記によると、吉本光蔵は、明治36年12月31日夜11時に東京新橋を発ち、明治37年1月3日、舞鶴海兵団から赴任した軍楽隊員26名とともに佐世保で出雲に乗り組み、明治38年1月23日に佐世保海兵団軍楽隊25名が現任者と交代乗艦した後も勤務を続け、3月23日に着任した後任の野坂栄太郎との引き継ぎを済ませ、翌3月24日に朝鮮の鎮海湾で出雲を退艦、横須賀海兵団に転任した。したがって、吉本は開戦直後の旅順港口閉塞作戦やウラジオストック攻撃、明治37年8月14日の蔚山沖海戦には立ち会ったが、明治38年5月27日のロシア第二太平洋艦隊（バルチック艦隊）との日本海海戦は体験していない。

4. 出雲艦上での定例の奏楽

吉本が乗り組んだ第二艦隊旗艦・出雲は、英国アームストロング社製造の装甲巡洋艦で、排水量9906トン、最大速力20ノット、明治31年（1898）に起工し、33年（1900）に就航した。出雲が率いる第二艦隊は、高速の装甲巡洋艦6隻（出雲、磐手、浅間、常磐、八雲、吾妻）からなる第二戦隊および巡洋艦4隻（浪速、高千穂、新高、明石）からなる第四戦隊と、通報艦・千早、駆逐隊、水雷艇隊とで編成され、出雲には第二艦隊司令長官・上村彦之丞中将が座乗し、浪速には第四戦隊司令官・瓜生外吉少将が乗り組んだ。

4-1. 定例の奏楽

出雲での定例の奏楽は、大砲手入・石炭搭載などの艦上での作業時と、司令長官室での夕食時に行われた。三種の奏楽は、ある種のBGMとして艦上で音楽が流された場面であった。

いずれも曲目は記載がなく不明だが、大砲手入は砲身を拭き磨く作業で、多くは午前中に30分から1時間ほど毎日行われた。司令長官室での夕食時の奏楽も、基本的に毎日行われていた。これに対して、石炭搭載は、戦時には士官の監督のもと水兵の特別任務として行われる重労働で¹⁹、頻度にするると週1回程度だが、時間的には3時間から8～9時間に及ぶ場合もあった。たとえば、明治37年4月～5月の二か月間に、出雲では合計10回の石炭搭載が行われ、そのすべての日に軍楽隊が奏楽をしている²⁰。間断なく奏楽し続けたとは思わないが、長時間きつい作業に従事する人々には大いに慰めになったはずである。石炭搭載中は石炭の粉塵が大量に舞うので、作業者は特殊な服装を身に纏い粉塵が目鼻耳に入らぬようにしていた²¹。その間、楽器を手にした軍楽隊が艦内のどこに陣取って奏楽していたのか知りたいところだが、日記中に手掛かりとなる記載はない。石炭搭載時の奏楽が、軍楽隊が乗り組んだ他艦でも通常行われていたのか、出雲での特殊事例だったのかも不明である。これらの定例の奏楽以外に、特別の任務のない日には「練習号」として合奏訓練がよく行われた。

4-2. 敬礼奏楽

つぎに目立つのは、軍楽隊の儀礼機能に属する「敬礼奏楽」（儀礼曲の奏楽）である。たとえば、出雲が佐世保に入港した明治37年3月11日、来訪した佐世保鎮守府司令長官（鮫島員規中将）らに対して敬礼奏楽が行われ、同年7月17日前日入港した対馬・尾崎湾に「有馬中将」（有馬新一中将か）が来艦した際も敬礼奏楽が行われた。これらの敬礼奏楽では、将官に対する儀礼曲《海ゆかば》（東儀季芳作曲）が奏されたと思われる。また、外国艦船に対する敬礼奏楽も行われており、明治37年3月9日朝鮮の元山に投錨した際には、在港中の英国軍艦（砲艦）フェニックスと訪問交換を行い、その出艦時には敬礼奏楽として英国国歌（吉本日記では「英国哥」）を奏した。

また、艦上では軍艦旗および長官旗を毎日掲揚した筈だが、吉本日記がこれに言及するのは、明治37年12月28日の「司令長官並ニ参謀長又上京セラル 本日ヨリ長官旗ヲ掲揚セズ」（翌年1月26日帰艦後に再び掲揚）と、旅順が開城した明治38年1月1日に「八時軍艦旗掲揚終テ直ニ大砲手入奏楽八時半終ル 九時四十五分遙拝式 終テ御眞影ヲ拝シ夫ヨリ艦長室ニ於テ稲田媛命ヲ拝シ御神酒ヲ頂キ夫ヨリ艦長発声 陛下ノ万歳ヲ三唱シ奉リ神盃ヲ挙ク」のみで、奏楽にはふれていない。一方、祝祭日には国旗掲揚と遙拝式が行われ、奏楽がなされていた。国旗掲揚時の奏楽については、吉本日記では開戦直後の明治37年2月11日（紀元節）に「朝国旗掲揚ノトキ楽器ノ機関部氷ル」とあるのが唯一である。日露戦争の開戦は厳寒期であった。以上、いずれも曲目の記載はないが《君が代》の奏楽がなされたと思われる。

4-3. 慰安奏楽

作業時の奏楽や敬礼奏楽とは別に、兵員の慰安のために奏楽を行うことも従軍中の軍楽隊

の大きな役目であった。開戦直前、佐世保で出艦の待機をしている間には、僚艦での家族招待会（1月23日吾妻、同30日常磐、同31日富士、2月5日笠置）や宴会（2月3日日光丸）に出張して奏樂を行っている。開戦後も、朝鮮・海州湾に投錨中の4月3日には、出雲での奏樂のほかに、軍艦・浪速に出張して奏樂し、4月7日にも軍艦・八島の兵員のために出張奏樂している。さらに、9月19日には艦長（出雲艦長・伊地知季珍大佐）の命を受け、佐世保海軍病院に患者のために奏樂するべく出張した。また、第四戦隊司令官・瓜生外吉少将の中将昇進の祝宴（同年6月8日）に浪速に出張したり、艦隊各艦の将校招待茶話会（8月5日、於尾崎湾）での奏樂を命じられたりする場合もあった。

時には、入港先の居留民に対する奏樂も行われた。明治37年3月8日には朝鮮・城津湾で領事館・居留民に対する奏樂を行い、同年4月22日の元山入港時には、居留地で奏樂行軍し、その帰途、元山小学校で生徒のために奏樂した後、生徒の遊戯などを拝観し、さらに領事館でも奏樂を行った。帰艦後、吉本は来艦者の中に元山の居留民・宮原嘉七の娘で自分の長女・幸江とよく似た少女を見かけ、「此児幸江ニ酷似セルヲ以テ宛ラ幸江ヲ見タル如ク大ニ征旅ノ憂情ヲ慰スコトヲ得タリ」と、珍しく私的な感慨を日記に書き留めている。

このように、従軍中の海軍軍楽隊は、戦闘のない時には、旗艦のみならず僚艦や入港先においてもさまざまな用務の奏樂をこなしていた。明治37年6月2日を例にとると、午前5時に第四戦隊の旗艦・浪速に乗り込み尾崎湾を出艦、対馬と本州との海峡を航行し、午後2時に戦地に向かう陸軍第三軍司令部の通過に会して奏樂を行い、日暮れまでともに進航して「告別ノ奏樂」を行った後、新高とともに対馬に向かって転針、夕6時半から1時間、浪速の兵員のために奏樂をして、翌3日朝尾崎湾に帰港、7時に出雲に帰艦している。その2日後の6月5日には、午前10時から出雲での勲章授与式で奏樂した後、正午から浪速での宴会に出張、4時半に帰艦し、出雲で定例の夕奏樂を行っている。

4-4. 楽譜の送付

こうした場で日々演奏された曲目については、残念ながら吉本日記には記述がない。だが、出雲に乗組中の吉本は、明治37年中は、横須賀海兵団在勤の高崎能之軍楽長・丸山寿次郎軍楽師や、舞鶴海兵団在勤の瀬戸口藤吉軍楽長など、各海兵団在勤の同僚の軍楽隊幹部たちから、たびたび楽譜を受け取っている（表1）。とくに拠点である横須賀海兵団には、前述した隊員の補充に加えて、楽譜の送付や謄写・借用をくり返し依頼していた。11月に共益商社から送付された「楽譜三部」は、発注楽譜でもあったのだろうか。また、9月には吉本の側から、自身の作曲した行進曲の楽譜や軍歌譜を、第一艦隊の本村四郎軍楽師、第三艦隊の赤崎彦二軍楽師や横須賀海兵団に送付していた（後述）。

各海兵団軍楽隊からは、毎日の奏樂に必要な楽譜のみならず、慰問状や食料品・新聞などの差し入れも頻繁に届けられた。各海兵団在勤者にとっても、戦争が続く限り、艦隊勤務を

命じられ戦地に赴くのはいずれ避けられぬ事態であった。日露戦争中の艦隊乗組軍楽隊の日々の活動は、このような各海兵団在勤の同僚たちとのネットワークとそのきめ細かい後方支援によっても支えられていたのである。

表1 出雲での楽譜の受取・発送一覧（明治37年）

明治37年 1月12日	【受】丸山ヨリ続テ長剣及ビ楽譜送リ来ル
1月25日	【受】横須賀ヨリ楽譜
1月28日	【発】横軍楽長師ニ通知出ス並ニ楽譜謄写依頼ヲナス
	【受】横須賀ヨリ楽譜来ル
2月11日	【受】夜横団ヨリ楽譜到達
3月17日	【発】高崎並ニ丸山ニ手紙（□□ニ楽譜取寄ノコト）
3月25日	【受】宅ヨリ小包（楽譜、ビスケツト、御守、周子ヨリ楊枝、東亜）
3月28日	【発】瀬戸口ニ返事（自□譜ノコト）
4月2日	【受】瀬戸口氏ヨリ楽譜
4月15日	【発】横楽長師ニ勝報並ニ楽譜受取返事
	【受】瀬戸口ヨリ信書並ニ楽譜来ル
9月9日	【発】本村ニ信書及軍楽譜軍哥 赤崎ニ全及楽譜（凱旋、陥落行進曲及軍哥）
9月12日	【発】横團ニ軍譜（旅陥行進、及凱旋征露軍哥、ポサウネ譜） 全信書（楽譜借入ノコト進級員数ノコト）
9月14日	【発】横團ニ楽譜呉佐ニ送ルコト
9月27日	【受】横團ヨリ楽譜四種借用ノ分着
10月1日	【発】横團ニ楽譜借用証書出ス
11月28日	【受】共益商社ヨリ楽譜三部
12月18日	【受】小包野坂ヨリ楽譜

* □は判読不能箇所。なお明治38年の吉本日記には楽譜の授受記事はない。

5. 作戦遂行・戦闘にかかわる出雲での奏楽

つづいて、作戦遂行・戦闘にかかわって出雲で行われた奏楽の状況を見ていきたい。すでに述べたように、吉本が従軍したのは明治38年3月までであり、その間に出雲が関与した作戦や戦闘では、明治37年2月から5月にかけて遂行された旅順港口閉塞作戦と、ウラジオストクのロシア艦隊を壊滅させた8月14日の蔚山沖海戦が最も重要である。

5-1. 旅順港口閉塞作戦

日露戦争の緒戦において三次にわたり決行された旅順港口閉塞作戦では、その都度、各艦

長から作戦に従事する「決死隊」(下士卒)が募られた。出雲からも第一次閉塞作戦(2月24日決行)には5名、第二次作戦(3月27日決行)には3名の決死隊が選抜され、彼らが閉塞船に乗り組むため退艦する前日(2月19日、3月19日)には、出雲の士官室および准士官室にて「告別ノ宴」が催された。第一次閉塞作戦に際しては、2月20日に出雲から選抜された5名が仁川丸に乗り込む際にまず奏樂を行い、その後、午前8時の全5隻の閉塞船の出航時には、総員が登船礼を行い、万歳を唱え、奏樂を行って見送った²²。開戦直後に行われた2月8日の旅順港奇襲攻撃の際も、「六時十分此夜旅順口夜襲ニ向フ駆逐艦十八隻ニ對シ告別トシテ総員上甲板ニテ奉拝ヲ唱へ后部司令橋上ニテ奏樂」と記されており、重要任務のため出航する際には軍樂隊の奏樂が行われたことが確認できる。吉本日記に曲名はないが、第1回・第2回の閉塞作戦で広瀬武夫と行動をともした大機関士・栗田富太郎の回顧記事によると、2月20日には第一艦隊旗艦・三笠の後甲板において、軍樂隊が《軍艦マーチ》につづいて《オールド・ロング・サイン》(すなわち《蛍の光》)を吹奏したという²³。

興味深いのは、2月20日の吉本日記に「此朝決死隊ヲ送ルノ哥アリ」という記事があり、決死隊の出発を見送る際に「歌」を伴ったとわかることである。この歌は、3月20日の第二次閉塞作戦の出発に際しても、「午后二時四十五分決死隊ノ三名閉塞船ニ乗組ム為メ退艦依テ決死隊ノ歌曲ヲ奏シ送ル」(下線筆者)と書かれているので、何らかの旋律が付されていたと考えてよい。3月7日東京日日新聞の「決死隊出発の光景」なる記事は、2月20日の状況を報じたものだが、「時しも旗艦〇〇より吹き鳴らす樂隊は高く勇ましく啾唳として左の譜を奏す」として、第一次閉塞作戦に従事した五隻の船名を詠み込んだ「決死隊ヲ送ルノ哥」と思しき次のような七五調の歌詞が記されている(圏点は閉塞船名)。

勇みて進め決死隊 旅順の港を閉塞し 敵の軍艦封鎖して 袋の鼠となせよかし
 制海権を我の手に 確に収むる此一挙 唐の仁川、天津も 豊けき武州と諸共に
 我が大君に報国の 堅き心をあらわさば 我武揚りて世中に 誉れは高く立ぬべし
 八百万の神々も 猛き勇士を守るなり いさをし立よ大丈夫 勇みて進め決死隊

この歌詞は3月13日東京朝日新聞にも「決死隊を送る」と題して掲載されており、それによると作者は第一艦隊所属の第三戦隊参謀・竹内(重利)海軍大尉だという²⁴。曲については、書きぶりから見て吉本が関与したとは考えにくく、新たに作られたのではなく、既存曲を用いたのではないかと思われる。ただし、東京日日新聞の記事は決死隊の歌を軍樂隊が吹奏したように読め、3月20日の吉本日記でも「決死隊ノ歌曲ヲ奏シ送ル」と書いているので、軍樂隊によって軍歌の吹奏がなされた可能性が高い。

旅順港口閉塞作戦に関わる歌としては、第二次閉塞作戦で壮烈な戦死を遂げ、軍神とされた広瀬武夫を歌った文部省唱歌《広瀬中佐》が有名だが、こうした戦争後に作られた歌とは

別に、近代戦のさなかに字義通りの軍歌が生まれ、吹奏されていたことになる。また、音楽とは関わりないが、4月12日の吉本日記に「此夜本艦ニテ隼一羽ヲ捕フ將士以テ吉兆トナス」と記すところにも、とりわけ日露戦争の緒戦において、さながら往古の軍記物にも通ずるような戦場特有の心性が渦巻いていたことを感じさせる。

3月28日には、第二次閉塞作戦を援護した水雷艇・蒼鷹など4隻が帰来したため奏樂を行い、無事に帰艦した出雲の決死隊3名に対して、帰艦時に「歓迎奏樂」が行われた。一方、広瀬少佐の遺骸を山城丸で内地に送った3月30日の吉本日記には、「総員後甲板ニテ敬礼「命を捨て」ヲ奏ス」と記され、軍の葬儀用の儀礼曲である《命を捨てて》が演奏された。この曲は、明治18年（1885）12月の『陸海軍喇叭譜』刊行までに「喇叭吹奏歌」の一つとして歌詞と喇叭譜は定められていたが、軍楽隊用の曲が作られたのは明治25年（1892）のことである。前年に、陸軍省から宮内省式部職雅楽部になされた依頼を受けて《命を捨てて》に曲を付けたのは、《君が代》の作曲者とされる当時の雅楽部副長・林広守の息子・林広季（1858～1898）である。林のつけた旋律は若干の改訂を施された上で、和声を付して編曲され、軍楽隊が奏でる葬儀用の儀礼曲として陸海軍で使用されるようになった²⁵。吉本日記によると、《命を捨てて》は、8月10日の黄海海戦と14日の蔚山沖海戦の戦死者葬儀が、8月28日に佐世保と東京で執行された際、それに合わせて出雲艦上で遙拜式を行った時にも演奏されている²⁶。

このほか、吉本日記には、佐世保入港中の明治37年3月13日に第二艦隊で半舷の陸戦隊を編成し佐世保海軍墓地²⁷の戦死者墓に参拝した記事、5月2日には4月25日に撃沈された艦隊所属の運送船・金州丸乗組の陸軍連隊死者弔祭が予定されていた記事（実際は水雷艇発見により緊急出艦し取り止め）、9月14日に長官室で蔚山沖海戦戦死者の追悼会が開催された記事、明治38年1月7日佐世保で戦死者弔魂祭参拝のため上陸した記事、などが見えるが、こうした戦死者追弔の場すべてに奏樂が伴ったのかどうかは記載がなく確認できない。

5-2. 蔚山沖海戦

日本海を南下し日本沿岸まで出沒して攻撃や攪乱行為を繰り返すウラジオストック艦隊への哨戒と追撃は、第二艦隊の重要な任務であったが、日本海の濃霧に阻まれてたびたび敵を見失い、翻弄され続けた。そのような濃霧の状況を彷彿させるのが、吉本日記の4月24日「夕四時半浦塩ヨリ四十哩沖ニ於テ航路ヲ南方ニ変更ノ際霧深キ為メ奏樂ヲ為シ端燈ヲ点シ後続艦ニ信号ス」という記事である。ウラジオストック沖を航行中のこの日、濃霧は特別に深く、僚艦同志が互いの航跡を見失うほどだったため、軍楽隊も奏樂し、あらゆる手段で後続艦に合図したというのである。吉本日記には、前日の23日「霧罩メテ咫尺ヲ見ルコトヲ得ズ」、翌25日も「濃霧咫尺ヲ弁ゼス」という文言が並んでいる。

その第二艦隊がウラジオストック艦隊を発見し交戦に及んだのが、8月14日の蔚山沖海戦

である。吉本日記には、「午前五時韓海蔚山沖ニ於テ浦塩ノ三艦ト遭遇直ニ戦闘五時十五分打方始メヨリ激戦五時間十時十五分ロシヤグロンボイハ逃走セシヲ以テ一旦引上ゲ凱旋奏樂十一時リュリック沈没生存者ヲ収容シ十二時半ヨリ竹敷ニ向フ午後七時四十五分尾崎湾ニ仮入港詳細ハ他ニアリ夕奏樂」と記されている。すなわち、朝5時にウラジオストック艦隊の三艦と遭遇してから戦闘が5時間続き、10時15分に（リュリックを残して）ロシーヤとグロムボイの二艦がウラジオストックに向けて逃走したので、一旦引き上げ「凱旋奏樂」を行い、11時に沈没したリュリックの生存者を救助した後、(対馬の)竹敷に向かい尾崎湾に仮入港した、というのである。しかも、軍楽隊は尾崎湾入港後に、定例の司令長官室での夕奏樂まで行っていた。

出雲での奏樂について、吉本日記の巻末に別記された「詳細」には、さらに「八時五十五分打方止メロシヤ、グロンボイヲ追撃引続発砲十時十五分追撃ヲ止メ旧位地ニ引還ス全時ニ凱旋奏樂十時三十七分リュリック沈没ノ報ニ接シ再ヒ奏樂十一時過其位地ニ帰着直ニ沈没ノ敵兵ヲ救助収容シ十二時半ヨリ竹敷ニ向ヒ帰還ス」とあり、ここから最初の「凱旋奏樂」の約30分後に、リュリック沈没の報を聞いて再度「奏樂」を行ったことが確実である²⁸。

このとき、出雲は弾薬の欠乏から、10時頃に二艦の追撃をやめ、戦闘を中止した。その直後に軍楽隊が奏樂したことは、出雲艦長・伊地知季珍が提出した8月14日の戦闘詳報に「十時四分 面舵打方止戦闘中止」「十時十二分 軍楽隊後甲板ニテ戦後ノ奏樂ヲナス」とあることから裏付けられる²⁹。しかし、凱旋奏樂は、たとえば8月29日に第一艦隊の第三戦隊に所属する軍艦・千歳が対馬の尾崎湾に入港した際、吉本日記に「総員歓声三唱凱旋奏樂ヲナス」と記すように、戦闘から戻った僚艦に対して行われるのが普通であり、激戦の只中にある軍楽隊が戦闘停止直後に奏樂を行うというのは、戦闘配置についていた軍楽隊が楽器を手に奏樂を始めるまでの準備を考えても、相当に異例のことのように思われる。それゆえ、この凱旋奏樂は特別な指示を受けてなされたものと考えたいが、日記に手掛かりとなる記述はない。

蔚山沖海戦を歌った有名な海軍軍歌《上村将軍》の第3番に、「[救助]と君は叫びける、折しも起こる軍楽の」という件があることが知られている³⁰。歌詞のこの件はリュリック沈没後の救助の情景と重ねられていて、現実にはリュリック沈没前と救助に向かう前に行われた軍楽隊の奏樂とは前後関係が異なるのだが、《上村将軍》を作歌した佐々木信香は、出雲艦上での凱旋奏樂について何らかの確かな情報を得ていたればこそ、想像や修辭としてではなく、戦時でもきわめて特別な奏樂が行われた事跡を歌いこむために、「軍楽」の語をあえて用いたのではないかと推察される。

6. その他の音楽関係記事

ここで、出雲に関連した日常的な奏樂、作戦遂行・戦闘にかかわる奏樂以外の、音楽に関

係した興味深い記事にふれておく。

6-1. 踏舞演習

吉本日記には、出雲艦上で「踏舞演習」（ないし「舞踏演習」）を行ったと記されている箇所がある。はじめは戦時にあり得ないのではと目を疑ったが、踏舞演習が実施された日を書き出してみると、すべて明治37年の4月から6月の午後に集中している³¹。この時期の第二艦隊は、朝鮮の海州湾や対馬の尾崎湾に停泊しながら、対馬海峡付近でウラジオストック艦隊に対する哨戒活動をつづけていたが、それにもかかわらず4月25日には艦隊所属の金州丸が、つづいて6月15日には近衛兵を乗せた陸軍運送船の常陸丸、佐渡丸、金沢丸が撃沈され、非常に苦しい立場におかれていた。踏舞演習のほかにも、この時期には停泊地での「四分ノ一上陸散歩」の記事も多く見られ、交代で上陸して体を動かし、戦いに備えていたようだ。こう考えると、一見、突飛な行動と映る「踏舞演習」も、先の見通せない哨戒活動がつづく中で運動不足やストレス解消の手立ての一つとして行われたのではないかと思えてくる。吉本はベルリン留学中、地元の「踏舞会」に所属してドイツ人たちと家族ぐるみの交流を続け、ダンスに習熟していた³²。出雲での踏舞演習の発案者はわからない。しかし、踏舞演習に奏樂が欠かせないことを考えると、吉本が何らかの形で関与していたのは間違いない。吉本日記には、音楽以外の余興は明治38年2月11日の「諸遊戯」「諸手踊」位しか見あたらないが、艦上では一般に相撲や演芸等もよく行われていたようである。

6-2. 鹵獲されたロシア海軍の軍楽器

開戦直後の仁川沖海戦（2月9日）では、仁川港に停泊中であったロシア太平洋艦隊に属する砲艦コレーツと巡洋艦ワリヤグの2艦が第二艦隊第四戦隊と交戦した。吉本日記には、このうち大破して自沈したワリヤグから鹵獲した軍楽器を、9月17日の佐世保入港後、9月19日に佐世保海軍病院での奏樂を終えた帰途、吉本が武庫に立ち寄り検分したという記事がある。鹵獲した軍楽器のその後の取扱いについては記事がなく不明である。日露戦争中のロシア海軍の軍楽隊では、クロムボイ艦上で楽器を手にした21名の軍楽隊員と楽長らしき人物1名を写した写真がある³³。

6-3. 出雲での新作披露

従軍中の吉本日記には、出雲において新作を披露したという記事が2件登場する。すなわち、《旅順陥落行進曲》と《浦汐沖氷海海戦》の2曲である。《旅順陥落行進曲》については、明治37年8月23日、旅順攻撃中の第九師団が蛮就山の砲台を占領したという情報と、黄海海戦から逃れた戦艦セバストーポリが旅順で機雷に触れ沈没せんとしているとの情報を受けて（実際はこの時には沈没しない）、「依テ夕奏樂ノ終リニ旅順陥落ノ新作行進曲ヲ奏ス」と記

されている。この時点で旅順が完全に陥落した訳ではないので、ある種の予祝行為ともいえる。タイトルから考えて、黄海海戦・蔚山沖海戦の後に、来るべき旅順陥落の記念に演奏しようとして作曲していたものだろうか。吉本は9月に恐らくこの曲と思われる「陥落行進曲」の楽譜を、「軍歌」とともに赤崎軍楽長と横須賀海兵団に送っている。

《浦汐沖氷海海戦》については、明治38年3月6日に「本日浦塩第一回砲撃一週年紀念ニ付夕奏樂ノ際 新作「浦汐沖氷海ノ戦」ヲ始奏ス」と、一年前のウラジオストック第一回攻撃を記念して夕奏樂において初めて披露された。こちらは行進曲ではなく、日露戦争緒戦において厳寒の日本海をウラジオストック攻撃に北上した日の描写音楽である³⁴。

7. 艦上での軍楽隊以外の音楽記事

最後に、吉本日記に登場する、軍楽隊以外の音楽記事を四つ挙げる。

一つ目は、明治37年4月4日、海州湾停泊中に行われた「薩摩琵琶会」である。この日の吉本日記には、「午後薩摩琵琶會アリ前後奏樂 夕引続キ奏樂 夜士官室ニテ蓄音機ニ取ル為メ奏樂」とあり、軍楽隊の側も、琵琶会の前後にも夕方もひきつづき奏樂を行い、さらに夜は蓄音機録音まであって、一日中大忙しだった。明治期の海軍は薩摩出身者が多く、日頃から郷土の音楽である薩摩琵琶を嗜む者がいたし³⁵、戦いを描いた曲が多数ある薩摩琵琶は、戦時の心性に同期しやすい音楽でもあった。明治期には日清戦争や日露戦争に題材をとった新曲も数多く作られ³⁶、明治30年代には軍関係の催しに限らず若者の間でも琵琶会が流行していたことを想起すれば、出雲での薩摩琵琶会開催は当然ともいえる。明治38年7月14日の読売新聞は、日本海海戦の開戦直前、第三艦隊所属の海防艦・松島艦長の奥宮（衛）大佐が、薩摩琵琶に堪能な軍医に《川中島》を奏させたという逸話を紹介している。

二つ目は、明治37年10月7日、尾崎湾停泊中にキャビンで行われた「筑前琵琶会」である。吉本もさすがに、「予ハ初メテ此節ノ琵琶ヲ聞ク」と特記している。海軍では薩摩琵琶はよく耳にしていただろうが、成立間もない新興の筑前琵琶³⁷を聞いたのは、文字通り初めてだったということだろう。

三つ目は、出雲がやはり尾崎湾に停泊中だった9月24日に、僚艦の吾妻から「尺八ノ名人」が来艦して、長官室で吹奏したという記事である。尺八は琵琶以上に戦地に持参しやすい楽器だったはずだが³⁸、吉本自身は尺八にはそれほど馴染みがなかったのか、琵琶と異なりこれ以上の情報がない。尺八について、仁川沖海戦に加わった装甲巡洋艦浅間の艦長八代六郎大佐が、戦闘準備を整えてワリヤークの出港を待つ間《千鳥の曲》を吹奏し、ちょうど「君が御代をば八千代とぞ鳴く」を吹き終えた時に「敵艦出港」の報に接し、しずかに竹をおいて立ち上がった、という逸話が伝わっている³⁹。

四つ目は、日露戦争中の軍艦にピアノが持ち込まれていたことである。吉本日記の明治38

年2月19日に、「午後一時ヨリ軍艦春日ニ到リ洋琴ヲ検シ四時帰艦ス」という記事があり、第三艦隊第五戦隊に属する装甲巡洋艦・春日にピアノがあったとわかる。もう一つは運送船だが、明治37年11月9日にも「午後一時艦長ト共ニ日本丸ニ行キピアノヲ検ス三時帰艦ス」という記事がある。ただし、邦楽器と違ってピアノは個人持ちの楽器ではありえない。「検ス」とあるので、あるいは頼まれて鹵獲品の検査に赴いたものかもしれない。

上記の四件とも、吉本日記では演奏曲目がわからないのが残念だが、ピアノは別として、琵琶や尺八に関しては、将兵の中に戦時中も日頃から慣れ親しんだ楽器を艦内に持ち込む者がおり、好みの音楽を携えて従軍していたことになる。戦場での「音」の役割を考える上で、軍楽隊の奏楽とは別に考察すべき見逃せない事例ではあろう。

おわりに

吉本光蔵の明治37・38年日記に基づき、軍楽隊の配置と奏楽、および軍楽隊以外の音楽記事について検討した。従軍中の吉本日記からは、平時とは全く異なる軍楽隊の姿が浮かび上がる。換言すれば、戦時における軍楽隊の奏楽状況を知ることなしに、軍楽隊の職掌の全体像は把握できないともいえる。吉本自身も、音楽と社交に明け暮れたベルリン留学時代とは別人の如く軍人としての属性が際立つ。明治37年5月26日には、ベルリン留学当時のドイツ駐在海軍武官で、軍人会でよく顔を合わせていた林三子雄中佐（第三艦隊所属の砲艦・鳥海艦長）が旅順において戦死した。6月7日、吉本は林夫人に弔慰状を出している。当然のことながら、戦場では生死は紙一重であった。

日露戦争従軍中の吉本日記は、戦争の最前線での当事者による音楽記録である。戦場でも軍楽隊が乗り組んでいた旗艦ではほぼ毎日奏楽が行われ、儀式や作戦遂行・戦闘にかかわる特別な奏楽も行われていた。ただし、軍艦での奏楽については、司令長官や艦長の意向により、艦によっても内実が違っていた可能性があり、本稿で明らかにできたのはあくまでも第二艦隊旗艦出雲での状況にすぎない。曲目の記載がごく少ない中で、葬儀用の儀礼曲《命を捨てて》の奏楽や、旅順港口閉塞作戦に際しての《決死隊を送るの歌》の生成、重要な戦闘やできごとを記念して作曲された《旅順陥落行進曲》《浦汐沖氷海海戦》の新作披露など、戦時特有の事例を拾い、戦後に作られた唱歌・軍歌との微妙な距離感を知ることができた。

艦内では、軍楽隊の演奏の他、薩摩琵琶、筑前琵琶、尺八などの余興演奏も行われ、戦時の軍艦内で聞かれた音楽にも、当時の日本の音楽事情がよく反映していたといえる。

今後は、つづく日露戦争後の吉本日記の講読を進め、吉本がベルリン留学時代に見聞した音楽や制度の日本への影響、戦時と平時を合わせた軍楽隊の実像を見極めていきたい。

注：

1. 河合太郎「日露戦争の回顧」『吹奏楽』昭和17年（1942）2月号。河合は明治34年入隊で当時は一等軍楽生（明治38年5月1日付で三等軍楽手に昇進）、後年は呉海兵団軍楽隊長を長く務めた。
2. 谷村政次郎「日露戦争と海軍軍楽隊」『楽水』第40号、1998年6月、114～130頁、同「吉本光蔵軍楽長と日露戦争」『楽水』第46号、2004年、72～79頁、同「戦場に響いた楽の音―日露戦争と陸海軍軍楽隊」『軍事史学』第41巻1・2号、2005年6月、54～67頁。谷村氏は、元海上自衛隊東京音楽隊長で軍楽史研究者。『行進曲「軍艦」百年の航跡』（大村書店、2000年）、『日比谷公園音楽堂のプログラム』（つくばね舎、2010年）等の著書がある。『楽水』は旧海軍軍楽隊員の親睦団体・楽水会の機関誌。2009年3月発行の第48号をもって廃刊となった。なお、陸軍軍楽隊については、大阪の陸軍第四師団軍楽隊で編成された第二軍附臨時軍楽隊に従軍した三等楽手・須藤元吉の日記が遺族によって刊行されており、第二軍にかかわる各地での奏楽状況や曲目を具体的に知ることができる（須藤元夫編著『明治の陸軍軍楽隊員たち』私家版、1997年）。
3. 塚原康子・平高典子「海軍軍楽長・吉本光蔵のベルリン留学日記」『東京藝術大学音楽学部紀要』第37集、2012年3月、43～60頁。
4. 日露戦争後の明治39年（1906）にも、吉本が旧主にあたる池田子爵邸に子どもを伴って年礼に訪れたり（1月6日）、小石川・後楽園で開催された鳥取県出身者海陸軍人凱旋祝賀会に招待され列席したり（4月1日）していることも傍証となる。鳥取県は明治9年から14年まで島根県に統合されていた。なお、吉本の父・周一が明治12年（1879）8月13日に病死したことが、海軍軍楽隊への届出文書から判明した（アジア歴史史料センター、レファレンスコードC09113872800、明治12年 公文類纂 後編 巻37 本省公文 人別部4止、防衛省防衛研究所蔵）。
5. 海軍軍楽隊でのピアノ伝習は、エッケルトの進言により明治12年5月からアンナ・レール（Anna Löhr）をピアノ教師に雇い入れ、明治23年3月まで続けられた。伝習した10名の名前は明かでないが、出雲を退艦し横須賀に転任した明治38年3月以降の吉本日記には、東京でレールを訪問する記事がたびたび見られ、後年まで交流が続いていたことでも裏付けられる。吉本はまた、ベルリン到着後早々にピアノを借り、音楽院入学前から個人レッスンに通ってもいた（塚原・平高前掲論文、55頁、注35）。
6. 瀬戸口藤吉「先輩吉本光蔵君の思出で」『月刊楽譜』昭和6年（1931）6月号、40～41頁。
7. M. Yoshimoto, *Japanisches populäres Lied für Gesang mit Shamisen-Begleitung. Eigentum der Kaiserlich Japanischen Marine Musikanstalt*, Tokyo: Toyodo, 1890. [請求記号787.9-Y65 m (洋)、マイクロフィルム請求記号YDM108443]。収録曲は、《楓葉》《越後獅子》《春雨》《夕暮》《沖之白帆》《櫓太鼓》《鞠唄》《五十三駅》。本楽譜の所在については林淑姫氏よりご教示を受けた。なお、瀬戸口は「先輩吉本光蔵君の思出で」記事中にこの8曲以外の曲名も挙げており、他にも印刷楽譜が存在する可能性がある。

8. 塚原・平高前掲論文、51～52頁。
9. 玉川氏所蔵資料とは別に、2011年7月、菊池武篤氏より吉本関係の新資料が東京藝術大学総合アーカイブセンター大学史史料室に寄贈された。内容は、1902年のドイツ語日記、楽譜、日露戦争時に吉本が撮影した写真帖、ベルリンから郵送された吉本の手紙等である。菊池氏は、吉本の妹・今子が嫁いだ井上英七郎の長女・貞の孫にあたる。井上家にはもう一人の妹・周子も同居し、吉本家と頻繁に行き来していたことが出雲退艦後の吉本日記からわかる。なお、不明であった吉本の名前の読みに関して、菊池氏より「我が家ではこうぞうさんと呼んでいました。」という証言を得た。
10. 吉本日記・明治38年1月22日「午后佐の軍楽師旅順赴任ノ途来艦 五時五分共ニ上陸」。
11. 吉本手帳に書き抜かれた明治36年9月1日内令第98号「海軍定員令」による。海軍軍楽隊の最高位に軍楽長が設けられたのは、明治30年9月16日の勅令第310号による（谷村「戦場に響いた楽の音」前掲、66頁）。
12. 谷村政次郎「戦場に響いた楽の音」前掲、64頁。
13. 同上、57～59頁。
14. 吉本日記・明治38年6月15日「本日第四艦隊乗組制定佐の軍楽師全旗艦ニ丸山軍楽師旅順ニ瀬戸口軍楽長第一艦隊ニ本村軍楽長横園ニ転勤」。
15. 吉本日記から第二艦隊軍楽隊での交代例を挙げると、以下の通りである。
 - ◇病氣入院退艦によるもの
 - 明治37年2月4日 岡副周蔵（一等軍楽生）病氣入院送籍退艦、同日佐世保海兵団より伊藤伊三郎乗艦
 - 同日 石川文太郎（二等軍楽生）病氣入院送籍退艦、2月5日呉海兵団より平田尚吉乗艦
 - 明治37年12月2日 五嶋佐太郎（三等軍楽手）病氣入院送籍退艦、12月8日横須賀海兵団より佐久間常二乗艦
 - 明治38年1月27日 早川弥左衛門（三等樂生）チフスの恐あり入院
 - ◇昇進転任によるもの
 - 明治37年12月8日 井下田龍平（一等軍楽手）軍楽師に昇進、12月9日横須賀海兵団附被命、12月11日佐世保海兵団より安藤貞一（二等軍楽手）乗艦
16. 谷村「日露戦争と海軍軍楽隊」前掲、117頁。
17. 同上、128～9頁に黄海海戦と日本海海戦時の三笠における軍楽隊の戦闘配置表がある。
18. 出雲の軍医科戦時日誌の「開戦当時ノ衛生部員及配置」による（谷村政次郎「日露戦争と海軍軍楽隊」前掲、124～125頁より引用）。ただし、三笠では、伝令・見張りについたケースもあった。
19. 『日露戦役記念帝国海軍写真帖』富山房、1905年所収の写真「(九) 戦時軍艦の石炭積込」および『朝日の光一日露戦役海軍写真』博文館、1905年所収の写真「洋中の石炭積み（其一、其二）説明文による。

20. 明治37年4月1日・8日・15日・19日、5月1日・5日・6日・12日・19日・30日に実施。
21. 『日露戦役海軍写真帖』博文館、1905年所収の写真「常磐艦の石炭積載作業」説明文による。
22. 吉本日記・明治37年2月20日「午前七時決死隊ノ勇士外一名退艦仁川丸ニ乗組ム 依テ奏樂ヲナス 全八時五隻ノ決死隊ハ勇マシクモ軍艦旗ヲ翻して出航依テ総員登桁万歳ヲ唱へ奏樂ヲナス之レヲ送ル 午後一時第壹第二第三戦隊ハ共ニ八口浦出艦旅順攻撃ニ向フ 午後二時半大砲手入奏樂 夜奏樂 此日細雨霏々霞かかりて海上至テ静穏 此朝決死隊ヲ送ルノ哥アリ」
23. 栗田富太郎『旅順閉塞回想談』啓成社、1912年、31頁。明治38年1月から三笠に乗り組んだ河合太郎は、戦時に出征を送る際の演奏曲目は、当初「ロングサイン」であったのを後に「軍艦行進曲」に変更したと述べている（河合太郎「日露戦争の回顧」前掲、27頁）。
24. 竹内大尉作の「第三戦隊軍歌」も合わせて掲載されている。栗田富太郎『旅順閉塞回想談』52頁にも、出航後の2月22日、閉塞作戦について協議中の天津丸に、第三戦隊司令官・出羽（重遠）少将に随行して来船した竹内参謀が「閉塞隊を送るの歌を寄せられた」と、この歌を記している。
25. 塚原康子『明治国家と雅楽—伝統の近代化／国楽の創成』有志舎、2009年、178～183頁。編曲者は不明だが、当時、宮内省雅楽部と陸軍軍楽隊・海軍軍楽隊の雇教師であったエッケルトの可能性が高い。
26. 「此日東京並ニ佐世保ニ於テ去ル十日及十四日戦死者葬儀執行ニ付午前十時遙拝式「命ヲ捨テ」ノ奏樂ヲナス」。また、海軍では靖国神社参拝および招魂祭用の儀礼曲として吉本作曲とされる《水漬く屍》（実際はコラルール旋律の一部改訂）が使用されたが、吉本日記では、横須賀海兵団在勤中の吉本が明治38年5月2日の靖国神社臨時大祭に一隊を率いて出張した際、《水漬く屍》を奏樂している（「東京 午前九時十二分瀛車ヨリ一隊引率出發靖国神社臨時大祭ニ出張神田着神保町旭館ニ宿舎午後二時靖国神社事務所ニ行き打合ヲナシ一旦帰宿夕食後六時出張七時半ヨリ招魂場ニ着席四十五分奏樂開始（水漬く屍）八時ヨリ奏樂九時式終了 御霊ヲ神殿ニ移ス此時徐行進（全上ノ曲）九時十分正殿ニ着廿分ヨリ再ヒ奏樂十時十分終テ帰宿十一時半帰宅ス」）。
27. 吉本日記に登場する佐世保海軍墓地は、太平洋戦争後に佐世保市東山公園として整備され、現在は佐世保東山海軍墓地として管理されている。
28. 蔚山沖海戦時の出雲艦上での最初の奏樂については、谷村氏も吉本光蔵遺品中の「明治三十七年八月十四日於蔚山沖対浦塩艦隊第二戦隊戦闘記事」と題するガリ版刷冊子の記載に基づいて触れているが（谷村「吉本光蔵軍楽長と日露戦争」前掲、78頁）、リユーリク沈没の報に接して行われた二度目の奏樂のことはこの戦闘記事や次項の戦闘詳報にもなく、吉本日記の巻末に記された「詳細」記事によってのみ知り得る情報である。
29. 海軍軍令部編纂『極秘 明治三十七八年海戦史 第1部 戦紀 卷11』付録「備考文書」（アジア歴史資料センター、レファレンスコードC05110072900）より第9号「明治37年8月20日出雲艦長海軍大佐伊地知季珍ノ提出セル8月14日蔚山沖海戦ノ戦闘詳報」。
30. 堀内敬三『定本 日本の軍歌』実業之日本社、1977年、211～216頁。

31. 4月5日海州湾(この日のみ「舞踏演習」と書かれている)、4月6日海州湾、4月11日海州湾、4月17日海州湾より韓海、鎮海湾に向け航行中、5月18日尾崎湾、5月20日尾崎湾、6月7日尾崎湾、6月22日尾崎湾。
32. 塚原・平高前掲論文、49頁。
33. 『日露戦争写真画報(1)』(博文館、1904年3月、国立国会図書館デジタルコレクション)所収「露艦クロムボイ甲板上の集合」。
34. 《浦汐沖氷海海戦》の楽譜は、京都市立芸術大学附属図書館所蔵の舞鶴海兵団軍楽隊旧蔵楽譜の中から谷村氏が発見し、録音もなされている(CD『音楽で綴る日本海海戦100周年』谷村政次郎企画、白樺録音企画制作、2005年)。
35. 江田島の海上自衛隊第一術科学校(旧海軍兵学校)構内にある教育参考館に、海軍士官(海軍大将・日高壯之丞、海軍大佐・都留雄三)遺愛の薩摩琵琶二面が展示されている。また、第二回旅順港口閉塞作戦の出航後、天候の回復を待つ間、閉塞船・福井丸船上の上甲板の一室では、兵員が「軍歌琵琶歌とりどりの芸当を演じ」ていたという(栗田『旅順閉塞回想談』59頁)。
36. 島津正『明治薩摩琵琶歌』ペリかん社、2001年。本稿で扱った内容に関係する曲として、《広瀬中佐》《閉塞隊》《常陸丸》《上村艦隊》がある。軍歌《上村將軍》と違って、琵琶歌の《上村艦隊》では軍楽隊の奏楽にはふれていない。近代戦争を扱ったこれらの琵琶歌は、歌詞は残っていても演奏されることは現在ほほない。なお、広瀬中佐の事跡は山田流箏曲《記念の鷹の羽》(明治38年、初世萩岡松韻作曲)にも歌われている。
37. 筑前琵琶は、博多の筑前盲僧琵琶をもとに、先行する薩摩琵琶や三味線音楽の影響を受けて吉田竹子・鶴崎賢定・橘旭翁らによって明治30年代に成立したばかりの新しい音楽であった。
38. 明治37年3月3日読売新聞の第三面「征露紀念尺八迅雷」に、上野三笑庵の一人・渡邊対三が知人の某陸軍中尉の出征にあたり、友人の書家・田口米舫氏秘蔵の尺八・迅雷を譲り受けて渡したという逸話が見える。
39. 明治37年3月18日読売新聞の第三面「兵の倂」。同じエピソードは『日露戦争写真画報(1)』前掲、4頁にもあり、「艦長八代大佐は、剛邁勇武の一徹ならず、其反面は優にやさしき風雅士にして、日頃尺八の技を嗜み、世にも稀なる名手たり。」と記されている。当時はよく知られたエピソードだったらしい。

付記：本稿は、平成23年～25年度科学研究費補助金(基盤(C))の研究成果の一部であり、2013年11月2日の日本音楽学会第64回全国大会での研究発表をもとに加筆修正したものである。明治37年・38年の吉本日記の講読と翻刻にあたっては、連携研究者である平高典子氏と研究協力者の丸山彩氏より常時お力添えを得た。また、日露戦争期の連合艦隊および艦上での業務に関して、大和ミュージアム館長・戸高一成氏よりご助言を賜った。記して感謝申し上げます。

Japanese Naval Bands during the Russo-Japanese War in 1904-1905: A Study of Diaries by Naval Bandmaster Mitsuzo Yoshimoto

TSUKAHARA Yasuko

At the Berlin Conservatory of Music (Die Hochschule für Musik zu Berlin) from 1900-1902, Mitsuzo Yoshimoto (1863-1907), a distinct naval bandmaster during the Meiji-era of Japan, studied as a “bandmaster student”. After returning to Japan in 1902, he served as the bandmaster of the IJN Second Battle Fleet’s flagship “Izumo” during the Russo-Japanese War from January 1904 to March 1905.

This study aims to clarify the activities of Japanese naval bands by examining diaries written by Yoshimoto from 1904-1905. This study concludes that:

- 1) During the Russo-Japanese War, the Japanese Navy had six bands attached to the Naval Base of Yokosuka, Kure, Sasebo, Maiduru and Lushun (Port Arthur), and four bands attached to the headquarters of each battle fleet. The recruiting and relieving of bandsmen due to disease or promotion was assigned to the band of the Naval Base of Yokosuka, in consideration of a bandsman’s rank and instrument.
- 2) During the war, Yoshimoto composed the march “Fall of Port Arthur” in August 1904 and the program music “Battle of the Icy Sea of Vladivostok” in March 1905. In addition, he frequently asked the bandmasters working at the naval bases to send new music.
- 3) The band of the “Izumo” performed during daily duties including maintenance of guns, officer’s dinner, and approximately once a week while coaling the battleship. Besides these routine performances, the band occasionally executed the salute towards foreign battleship and generals, and entertained the fleet crew and their family as well as the inhabitants at the port.
- 4) During battle and field operations, the band of the “Izumo” played special music including; (1) On February 19th and March 20th of 1904, the band lead the fleet in the singing of the new military song “*Kesshitai wo okuru* (Sending off the Death Squad)” and the sending off the selected corps to the Port Arthur blockade. The band also played the reception music for the survivors who safely returned to the fleet, as well as the ceremonial piece of the army and navy, “*Inochi wo sutete* (Sacrificing Their Lives) for the dead; (2) The band, who had participated in the fighting, played triumphant music for the fleet

immediately after the five hours' fierce Battle of Urusan had finished on August 14th, 1904.

5) *Biwa* (*Satsumabiwa* and *Chikuzenbiwa*) and *shakuhachi*, were also played privately within the fleet. Naval officers and sailors brought this familiar music with them to the battlefield.